

ネットのバカ

好評連載 206



呉智英 評論家

現実のバカ

できるのはそこまで

二月十三日「週刊新潮」からコ

メントを求める電話があった。森喜朗オリ・パラ組織委会長の「女性蔑視発言」が問題になっている。が御意見をうかがいたい、という。ああ、それは森喜朗が低学歴だからだね、と、私は答えた。受話器の向こうで、記者が笑っているのが分かる。でも、こんなコメント、記事にできないよな、と私。一応デスクに聞いてみますが、と記者。なかなかしつかりした記者だ。学歴問題は脇へ置いて、森発言パッシングについては……と、私は二十分ほど話をした。

同誌二月二十五日号では、限られた字数内でよくまとめられている。

「こうした風潮を評論家の呉智英氏はこう斬る。『寛容になれという不寛容』が蔓延^{はびこ}っている」

私の念頭には、昨年末に出た森本あんり『不寛容論』（新潮選書）があった。森本は二〇一五年には『反知性主義』がポピュリズム流行の風潮の中で話題となった。今度の『不寛容論』もいくつもの書評で取り上げられている。新大陸アメリカで寛容思想がどのようなに成立したか詳論し興味深い。しかも「寛容の強制」というパラドックスが成立することも指摘している。私が週刊誌でコメントした「寛容になれという不寛容」のことだ。

これは論理学・哲学で言う「自己言及のパラドックス」である。

くれともふさ／1946年生まれ。日本マンガ学会理事。近著に本連載をまとめた『日本衆愚社会』（小学館新書）。

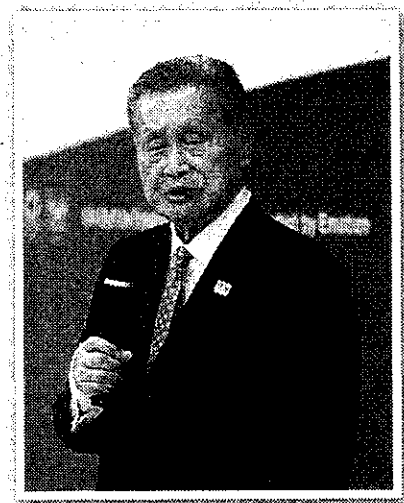
「全称命題のパラドックス」と言ってもいい。命題propositionとは、提案、提題、題を命^{いのち}べる、という意味で、命とは無関係だ。自己言及のパラドックスは、古く聖書にも出てくる。「クレタ島人が言った」クレタ島人は嘘つきだ」（テトス書1・12）。じゃ、その発言（命題）自体が嘘ではないのか、ということになる。仮にこれが「クレタ島人の半数は嘘つきだ」なら、こうしたパラドックスは生じない。全称命題だから、こういう逆説になる。部分命題ならパラドックスは起きない。

さて、寛容という規範について考えてみよう。これは、憲法や国際の宣言にもしばしば登場する大きな規範、いわば「全称的規範」ということになる。一方、小さな、部分的な規範も存在する。「早起き励行」などその一例である。勤め人や児童生徒などは早起きが励行されるべきだが、私などは九時前に起床したことがない。近所の新聞配達所の店主は、

毎日十二時起きです、と言っている。もちろん深夜の十二時である。そうであれば、早起き励行が国際的規範になることはない。対するに、寛容はパラドックスが生じるような全称的規範になっている。

森本あんりは二月二十八日付産経新聞に寄稿し、「寛容は是認でも理解でもない」「是認できなくても、相手を拒絶せず」「われわれにできるのはそこまでののである」としめくくっている。

同じことは、自由、平等、人権についても言える。これだつて全称命題のパラドックスが生じる。自由を否定する自由、平等に不平等を主張する権利、反人権の人権「我々」からも「彼ら」からも「できるのはそこまで」なのか。



辞任した森前会長